



四力南影長自

遠 13
1925
4



門へ通19
1925
4



年忘新南力巻四

○ 泥亀沼

大西

を子名石を以つめあひひを遊石おどとあるまほして石
好の人くううくと路とを池ををわめと云なぐなく
阿中よあまをば一ふ珍物^{えんぶつ}あれよまするまのあじと
うやくしくさるとあるあまはみより小^キ弟^ニあ出
はあするよまぶくオヤウて押さつて上かをを足
はへ古あくあをよめてとりのそまひかかると世よ
ああ坂の園あはりーとまをぶじくま^まをとり見

ち
自
り

とバ系つんの刻きぐ

△ 妙く教

一名

門徒寺の傍敷があらはしつぐんといふと近所の佛を
屋敷もやはし込でかりかりぐ住持まよりのさうあや
みぢうく下をんとお入のさうあやよがわをかせが仏を屋
敷屋大いさうをさおちそうあやのものよの傍さびよアノ
さうあやよ家をおうーあやるやあやいほう着とらうむ
せぐ住持ハテ板もの家を仏々やあやもあやよし
ていあんまりべいであやよ

○ 大佛の形ひ

シムホ

何と云ふ事かいた坂よも大仏を一耕いあやうあや
いとのトヤナ形をてんまういこくまへよあやうがどの位
よびるのトヤナももあやうが京の大仏の傍よあやいッリヤ
大てあお入トヤあの本材木は直に直ちぐりぐまるそ
あひへおろうあハテ町くハな如住持てまうるイヤ
くまで下くの冠をまてあやまよはよあやくをん
のイトくの収ぶはまうぐあやッリヤアぞうまうハテ
後をよまてはらるハあやあやトヤあやまよはよあやくをん

△ さいどぐく 川 子

考り大名の家老蔵のせんも布がびけこり奪野を
よめ百姓のうごこのを背よかんとまふまとなのよ
おがびて百姓は後他ひはしとあれたるがたのびく
たごき長るを殿さぬはくぐはらぬかされぬねや
たのゆひがも老をさるそくゆされたるたうのよ出て
ちよめ百姓のよごごをかるよあてあふらうをあふ
とやこれ見まよくの老の只先能をあるこよしく百姓
があふらうごごしてたもまきやくのたを二人と考てこ

○ 診まのむく 角 楯

そむじ浦信^{うら}を命とする大英男^せ濃多のどのをこよ
物をたきやうじが診まのこひめふとあふらよのせは
んてよりごうく、病ひは念さまきじを診まを悟り
て術をめらじと念むとあはしりたれどもまて診まな
まぬらうあまうはくじとぬらうあど近^{じん}隣^{りん}の人とぬ
よて日はゆる約の業^{わざ}まを出一らるが日本と六四くつあめ
て中女あまのしんるこくあびらな丁よ射^あをはけて上を
後^{のち}ひあふこをぬねとるをよしくしてたがたこたも

角 楯 氏

おのをあらわらうらうらごぞ隣をあらわかりなれどうらうら
是をおじらうらうらごのこよかり朝まはりのひせき
れがらうらうらごをまじく今川林をふるはして果
見も用ひひび大の科人のけさよるまじきうさうとみる
又浦一まのまぢらあまらのるうらうらの大を
釣をのりて又車をほりまじたぬらりのせのまじき
こととこの科人のたまけのめぐりうらうらまじき
ワイ

△ 神履の風味

のひ女

小なぬでまぬりらとびのお仲居たしこおひまはは

よのもは中居ぐいさよりとやちせのあひまはしこおあ
のたまひめうらうらをわさつてあるとあまらうけひひる男よ
がるとまねでもつたしこ他たうらうらひまらうらうら
とんぐらうらとまねのようならうまひひるらうらうらとわ
ちられのどやとごちよままね外のなはしよあうらうらなはし
のまらうらうらとあひまはしたしこまらうらあひまはして
うらうらとあひまのけいもまねのけいもまねのけいもまね
くことあひまのけいもまねのけいもまねのけいもまねの
はゆりうらうらうらまねのけいもまねのけいもまねのけいも

お前のたまごのねむらひのきこもつてお前のきこもつてお前を
きこつてお前のきこもつてお前をきこつてお前をきこつてお前を
れだよふようちあんたの二倍であつて

○ 船次への信心

如雲

さる船次へお前のねむらひのきこもつてお前をきこつてお前を
おん丸と申す船のせんぎうでかゝるお前をきこつてお前をきこつて
お前をきこつてお前をきこつてお前をきこつてお前をきこつて
お前をきこつてお前をきこつてお前をきこつてお前をきこつて
お前をきこつてお前をきこつてお前をきこつてお前をきこつて
お前をきこつてお前をきこつてお前をきこつてお前をきこつて



るさまつてきりすもせんともていませれど信心の波し
よくいせぬせぬがせられたりのうらみの業を信ふことなれ

△ 赤いばの巻 人徳

らんどの大坂後念のさおんあを田舎大どん新所
で使えけうあんでも安きとくかまじと揚屋をたご入
世ふす持ゆり回念の子代せんごうがにおふりて
りんせれどいつも起るおぞろとしてるおん強念の起
向業まあよいつやし業てまごつしよべとさりよをりれ
をえ念せの起りう十本ういつよたなごしてゐるをやう

く〜あうあうてあもがうは落へあうとう〜の方をみ
たきべふか故事てあひい

△ 赤いばの一卷 野田鮮次

^{あま}梅幸が忠居づうんよして幕の君ははれどよのまは
ナニト ^ままの〜まよあつてのもろくろのたごせ十てあう
ふハうめのもあせ十七でおのまうよま〜らあもあうだ
分けてあす〜ハイヤまて〜のさんあが念めと
あ十と七十とのせう念のうらナヨい〜〜とま〜が
あいてまた乃のさるやうあす十四

○ 徳川の鐘 常流

むうの夜中村十政所を本役考づけ世でより伝く延
種よく是でなごうれいおちかおちよれたのなほおちうと
かく出ぬの報として居るゆゑともむむ人の鐘をほん
とよまはるくおすより是より佐夜の中ふらるるえ
をもしる合ぬふとくかあせりあうハハア 爰よぬたが
らふゆれでもたふでも伝心まるけいゆふとくまお
れかしまいそあねだけ然むゆとせいのしはらうらぬと
いぐいやサたとはほこらねたとむくハハとくあきついで

あんでありたとそとや多^ち増^ち齋^ちしてあむまの伝心を
あけてむむ人のかみとあぞく^くの^くあ^くま^くや^くあ^くの^く
あや出来てサア初日をとてはしめてあさうまうぐ^ぐ
よたうい

△ 花生で笑 百毒

お宿よりよのうらお月よあらぬ^くの^くあ^くあ^くあ^く
まいたびるり京あおのぢうなされはしこひああ金の時
分ちともいんあまたのせき居をば「あやあうあわて
牛尻席のむむ人のあまうりあうい^いの^いあ^い切^い切^いの中^い良^いの^い

板書を論じたりはしてあつたのぢやうの仕うぢやと
うげ初めは目てあつたつてあつたつてあつたつてあつた
がらをいふはつてあつたつてあつたつてあつたつてあつた
かりくぢやあつたつてあつたつてあつたつてあつたつてあつた
まゐるよ、それなまぢやあつたつてあつたつてあつたつてあつた
であつたりまゐるのよ

勢角力巻四終

